

関西福祉大学

図書館だより

Information Wave No.21 2010年

第21号

2010年9月24日発行

関西福祉大学図書館

〒678-0255 兵庫県赤穂市新田380-3

Tel.0791-46-2506

Fax.0791-46-2535

大学図書館の役割 ―情報化時代に向けて―

大学院社会福祉学研究科長 坂本 忠次



私は、幼い時から本が好きだったこともありよく図書館には通いました。中学、高校の近くにあった私立図書館(現在の岡山県浅口市にある金光図書館)に放課後や日曜日のほぼ毎日通って様々な本を手

当たり次第にむさぼり読んでいたことを思い出します。私の現在までの人間形成の基礎は、当時図書館で読んだ小説(特に歴史小説)や伝記、哲学書などに負っているといっても過言ではありません。

さて、大学の研究・教育にとって図書館は切っても切れない関係にあることは言うまでもありません。特に大学の図書館は、学生、院生にはもちろん教職員の研究、教育、知的生活にとって不可欠のものでもあります。外国の大学の図書館を訪れて気づくことは、大学図書館が学生生活と不可分の関係にあることです。かつて友人が留学していてカリフォルニア州の田園地帯にある農業関係の有名な大学を訪れたことがありますが、大学図書館は、午後11時頃まで開館していて、男女学生が夜まで読書したり、談話室で語り合っ図書館で楽しく過ごしていることでした。周辺が農業地帯でほかに娯楽施設がないところに原因があったかも知れませんが。アメリカの大学図書館(学生会館にはもちろん)には地下にコーヒー店やバーがあるものもあり、この方法がよいかどうかは別としても、学生が図書館に魅力を感じ親しむように大学側も努力していることが感じられました。

次に、ヨーロッパの国立・市立(私立を含む)図書館を

含め、図書館のアーキビスト(日本の司書に当たる)の専門家としての地位がきわめて高く、社会的にも尊敬されています。利用者のそれぞれの専門的な質問に対してもよく対応してくれますし、各大学図書館でも学生・院生の論文作成にはきわめて親切に対応してくれます。私も本学の図書館職員の方には日頃いろいろ助けられて感謝していますが、日本の図書館の職員の専門家としての地位が今後一層向上し、周囲からも認められて行くことが期待されます。これは、社会福祉士の専門職としての地位の確立の問題と同様ではないかと思います。

最後に、最近の図書館をみていて、情報化時代への対応が急速に進みつつあることが注目されます。全国の大学図書館の名称だけをみても、大きく変わりつつあります。学術情報センター(カッコ付き図書館としている大学もある)という名称が、芝浦工業大、大阪市立大、横浜市立大、大阪府立大、県立広島大、私学でも日本大、中部大、早稲田大、東京農業大ほか多数でみられます。またメディアセンター(島根県立大)などの呼称もみられています。これは、大学図書館の情報化時代への対応を意味していると思われ、紀要論文や新聞雑誌記事などの情報がウェブサイトを通じて入手できること、また図書館所蔵の学術資料は、文書のみでなく、ビデオ、CD、テープ、写真など視聴覚関係の資料も次第に多くなり、多様化しているからであり、これら資料の永年保存のあり方も課題となっています。文書館を記録資料館と呼んでいるところもあり(ex.岡山県)、今後情報化時代に向けての図書館側と利用者側の対応のあり方が大きく浮上してきているのです。

著書紹介

新しい日本の歌 1

(古瀬徳雄作曲、マザーアース、2009年10月刊)

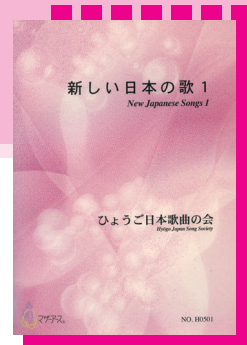
社会福祉学部長
社会福祉学部 教授 古瀬徳雄

阪神大震災直後、いろいろなジャンルの芸術家たちが救援に立ち上がりそれぞれの立場で協力し活動しました。詩人たちは「詩集 阪神淡路大震災」を第3集まで出版し、その詩を歌にしようと、作曲家が詩を選んで作曲し、歌手が演奏会で歌う試みが開始されました。その後、兵庫県の詩人、作曲家、演奏家との協働が生まれ、この創造的な交流は発展的に組織化され、2007年に「ひょうご日本歌曲の会」が誕生し、詩人52名、作曲家13名、声楽家19名、合計84名の会員で発足しました。詩人が書いた詩に作曲家が作曲し、声楽家がこれを歌うという第1回の演奏会「新しい日本の歌」が、2008年11月28日に開催され、すばらしい企画と高い評価を受けました。当夜に取り上げられた作品は「新しい日本の歌 1」となって、発刊されました。兵庫県という一地方だけでなく、全国へと、また歌詞をローマ字表記にすることによって世界にまで発信し、日本語の美しさを歌に託すという日本歌曲の美意識を、声を通して響かせていこうとするものです。

2008年4月、会員の詩人たちから多くの詩が寄せられ、その中から豊岡市の永井 薫氏の「雪がふる」「お母さん」の2詩に共感しました。雪への情感と、母への思慕の心情とが、歌心

を育み、それらがひとつになり、曲をつけようと心に決めました。歌詞の歌い込みに時間を要しながら、やがて音となって立ち現れては移ろい、逡巡を繰り返しながら、音たちは居場所を定着して作品となりました。「雪がふる」は、しんと降り雪の静謐感を、拍節の出ない音型で反復し、深い心情の寂寥感を淡々と歌っていくことに心がけました。「お母さん」は、優しさ、温かさ、微笑は、3連符を多用し、明るい変ホ、変イ長調を選ぶことで表現し、リート形式を用いて母への思いを重ねていくことで、より一層、聴き手の共感が深まっていくように作曲しました。その結果、二つの詩に対する音楽性の差異を導く結果にもなりました。

西宮市のプレラホールでソプラノ宮本泰江、ピアノ江頭義之により初演され、聴衆は温かく受け止めて下さり、好評を頂き、発刊が実現しました。本会は継続され、2009年には第2回の演奏会が兵庫県立芸術文化センター小ホールで開かれ、「新しい日本の歌 2」も発刊の予定です。また、今も新たな詩に、発想を呼び起こさせながら、作曲をし続けているところです。



津田白印と孤児救済事業

(坂本忠次編、吉備人出版、2010年2月刊)

大学院社会福祉学研究科長
社会福祉学部 教授 坂本忠次

本書第I章で取り上げている津田白印(本名明導)は、浄土真宗の僧侶で画家、書家、教育者でもありました。岡山県小田郡笠岡村(現在の笠岡市)の浄土真宗本願寺派の浄心寺に、住職津田明海、たかの次男として生まれました。1877(明治10)年、16歳で長崎県の佐世保に近い桐ノ浦の金性寺に入って僧侶としての修業を積み、同時に絵画(南宗画)の勉強も始めたのでした。郷里笠岡に帰って後は、1888(明治21)年、27歳で尾道市生まれの初音さん(号は清馨せいきい)と結婚します。奈良監獄教諭師の活動をしながら、非行少年を生み出す社会環境について研究していく内に、自ら社会事業家になる決心をしたと言われています。

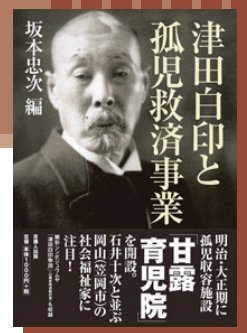
社会事業への出発として、1900(明治33)年、小田郡富岡村(現笠岡市)の旧本林寺において甘露育児院を創設しました。甘露育児院は、その後1906(明治39)年、東北飢饉のさい多数の孤児を収容して施設が狭くなり、市中心部の浄心寺に育児院を移転しました。当初の開院式の参列者は45名で、院児は1名でしたが、1900年度～1924年度までの25年間に延べ469人の孤児を収容しています。しかし、恤救規則(明治7年)に象徴されますとおり、院の運営は、皇室からの下賜金などがあるのみで、公的扶助

はほとんどなく厳しいものでした。開院以後の財源として、主に寺院住職及び地方名望家等の寄付による義捐金、音楽隊等収入、院児の組む麦桿真田、物品販売の収入などでした。

また、院主の白印の画いた絵や書による収入のほか、夫人の初音さんが陰でその運営を助けました。衛生問題が起こる中で院への一般からの誤解もありましたが、職員一同よく努力しました。

1924(大正13)年3月31日遂に院は閉鎖を余儀なくされましたが、明導は閉鎖前年の1923(大正12)年4月1日、浄心寺境内甘露育児院施設の跡地をもとに私立淳和女学校を設立し、初代校長に就任しました(その後、黎明高校、現在の岡山龍谷高等学校となる)。孤児救済の社会福祉事業から教育事業へと転換したことが注目されます。

本書の第II章では、キリスト者の石井十次の岡山孤児院に象徴される岡山県の戦前戦後の民間社会事業の展開過程について述べ、また、後半のIII章では白印先生の孤児救済事業のあしあとを顕彰するシンポジウムの記録なども収録しています。



日米の社会保障とその背景

(杉田米行編著、大学教育出版、2010年5月刊)

社会福祉学部 教授 村 上 貴美子

日米の社会保障と その背景



100年に1度といわれる不況の中、日米両国は多額の財政赤字を抱え、福祉国家の支柱である社会保障制度改革という大きな問題に直面している。本書は主にアメリカと日本の社会保障を歴史的にとらえ、将来の改革の方向を検討するという、編著者・杉田米行氏の求めに応じて、各論者の日ごろの研究成果をまとめたものである。

全体は2部で構成され、第1部ともいべき前半(1章から6章)は主としてアメリカの社会保障を取り扱い、第2部・後半(7章から11章)で日本の社会保障を取り扱っている。以下、簡単に紹介する。

前半：英・米国の社会保障

1章：20世紀初頭自由党政権下の社会政策と政治政策(岡田新)では、イギリスの1906年から10年1月までの政治状況を分析し、第二次大戦後の福祉国家の原型の一つである「ベヴァリッジ報告から国民保健サービスに至る道」の原点を明らかにしている。2章：20世紀転換期ニューヨーク市公衆衛生行政(平体由美)では、20世紀転換期のNY市の公衆衛生の事例研究を通して、ともすれば忘れがちな公衆衛生の社会保障制度の位置づけを行う。3章：アメリカ医師会と医療保険—日本との比較の中で—(山岸敬和)では、1910年代から40年代の日米の医療保険制度の成立過程を、医師会およびその戦略を分析し、その後の両国の医療保険が異なる道を歩むこととなる原点を明らかにした。4章：アメリカ児童福祉の解釈(向井洋子)では、「受益者が利益集団を形成して政策決定に関与することのない」児童福祉分野に視点を当て、国家に主眼を置いてニューディールが作り上げた社会保障制度の矛盾を先行研究の分析から明らかにした。5章：アメリカにおける1996年福祉改革法とジェンダー(佐藤千登勢)では、1996年の福祉改革法の審議過程を分析し、そこから抽出された「フェミニズム」は白人中産階級的な視点に基づいたものであり、貧困女性特に有色人種の女性に置かれたものでないことを明らかにしている。前半最後の6章：アメリカの福祉国家再編と対貧困者対策(西山隆行)では、クリント

ン政権下の貧困者施策、特にワークフェア施策を取り上げ、アメリカの現在の貧困者施策は、労働市場への参画が前提条件であることを明らかにした。

後半：日本の社会保障

7章：社会福祉事業の拡大・拡充とその限界(村上貴美子・宇都宮みのり)では、敗戦後・GHQの占領下で形成された社会福祉事業を、成立過程から現在まで展開を特に①社会的扶養の拡大(法的根拠、人口構造等から)、②の家事労働の外部化・商品化、の視点から分析を行い、社会福祉事業の労働市場における市民権の獲得を提言している。8章：従来日本社会保障パラダイムと日本型社会保障の方向(増山道康)では、1973年「福祉元年」以降の社会保障制度の再構築を検証し、その実態において日本型福祉社会が継承されていることを明らかにした。9章：地域における社会保障システム(杉山章子)では、地域医療の取り組みの先駆者である長野県佐久地方の10年にわたる実証研究から、社会保障の限界を切り開く「地域の社会保障」の在り方を提言する。10章：日本における生活保護と社会保障政策(野村茂治)では、①高齢化・少子化、②財政赤字、③世界経済のグローバル化という状況下で、生活保護制度を補完政策から脱した制度として、社会保障制度を再構築することを提言する。最後に11章：OASDI方式の厚生年金保険への適用可能性(山本克也)では、アメリカの公的年金制度で適用されている確定給付・賦課方式の、日本の厚生年金保険制度への適用可能性を分析・推奨する。

以上、本書は20世紀の日米の社会保障制度を歴史的にとらえ、将来への方向性を示した。冒頭に説明したように本書は編者に意向を受けた各論者の個別研究をまとめたものであるが、20世紀の社会保障を分析することによって、将来への方向性を示すという編者の意図は見事に結実したといえよう。日米の社会保障制度史として、また現状分析書として有用な書である。

新体系看護学全書『臨床看護総論』

(宮脇美保子編、メヂカルフレンド社、2009年12月刊)

看護学部 教授 八 木 彌 生



看護教育カリキュラムは、時代のニーズを捉えるという観点から何度も改正されてきました。その中で「臨床看護総論」という科目は一時期消えていましたが、再度復活するという事で分担執筆依頼がきました。編集は古い知己で何年か同じ学校で看護教育に携わったことがある宮脇美保子さんです。一回限りの編集会議でしたが、このテキストにかかる基本的な意図は短時間で確認することができ、章の分担が決定しました。それは長い交友のうちに、看護の考え方を共有して来られたからだと思います。

当初私は、勢い込んで(!)たくさんの章を担うことを承諾してきたのですが、第1章に盛り込む内容を吟味しているうちに意外に推敲の時間が長く必要であることがわかってきて、同じ学部で成人看護学を担当している大釜徳政准教授と大塚眞代准教授にも得意分野の執筆を担当していただくことになりました。二人の先生は快く引き受け、それぞれの得意分野について、初学者のために吟味を重ねて執筆されました。

さて、この『臨床看護総論』では、看護学概論と看護技術を基にして臨床の場でどのように看護を考え実践していけばよいのか、という視点から執筆をすすめました。

具体的には、

1. 臨床という場について、そこでの看護の心得
2. 人間とは何かということについての基本的な理解を踏まえ、医療・看護を必要としている患者と家族を理解すること
3. 理論を活用したうえで、さらにそれらを学生が理解しやすいよう看護師の日常的な体験、エピソードなどを盛り込むことなどを心がけました。患者については“臨床”で出会う人であっても、生活者として自分の人生を歩んでいる一人の人として捉えることを強調しました。“臨床”という場での出会いだとしてもそれは、人間(患者)と人間(看護師)がお互いの人生のなかで出会うことに外ならないからです。

私は長い間、看護者として人間をどのように捉えたら看護に活かせるのか、その深まりが増すのだろうかと考え続けてきましたので、そのことを本書の第1章に著しました。これまで看護のテキストに多用されてきた心理学的な事柄だけではなく、文化人類学的な視点も必要だと考え、これまでの学びの中から少しそれらを盛り込みましたが、読者がどのように受け止めてくださるか、評価を期待しています。

■ あったか介護・看護のための用語集

■ (水沢英洋監修、太田貞司・三苫博・山本則子編集、照林社、2010年2月刊)

社会福祉学部 准教授 谷 川 和 昭



本書を一言で言えば、専門家の解説でよくわかる高齢者の医療・介護・福祉の連携を図る実践的用語集とでもいえようか。

その特徴の第1は、医学分野、看護分野、介護・社会福祉分野にわたり約2,000語を収載していることである。これほどの数までにのぼっているのは、社会福祉学部学生にとっては社会福祉学に隣接する医学・看護学のテクニカルターム(専門用語)に慣れ親しむのには打って付けといえるし、看護学部学生にとっても社会福祉理解には最適といえる。

第2は、現場の悩み・問題点解決の一助となるような処置、対策にも触れて解説していることである。たとえば、「嚥下」(「えんげ」と呼び、食物を飲み込むこと)という用語を見てみると、「嚥下」以外にも「嚥下訓練」、「嚥下障害」、「嚥下性肺炎」などの関連用語と「嚥下障害の徴候」のイラスト、「嚥下性肺炎の予防(嚥下体操)」など処置や対策が必要な場合にも役に立

つように編まれており、一般の方々にも有用といえる。

第3は、第2とも重複するのであるが、関連語を参照語として示し、系統立てて総合的に理解できる構成となっていることである。筆者は「地域福祉」その他の社会福祉専門用語を20語ほど分担執筆しているが、たとえば「地域」に着目すると意外にその数が多い。「地域ケア(コミュニティケア)」、「地域ケアシステム」、「地域生活支援事業」、「地域福祉コーディネーター」、「地域包括ケア」等々、25語も見受けられるが、多くの項目の解説文の下りに「→ ○○○○」の形で示されている箇所があることは参考になる。

第4の特徴としては、図表を多用し、ビジュアル的に把握できることである。巻頭カラーの口絵の解剖イラストを参照することは、人体の全体像への理解を深めることにつながる。新しい社会福祉士の養成カリキュラムでは、「人体の構造と機能及び疾病」という科目がテキストの第1巻目となり、国家試験の最初の科目に位置づけられた。看護師においても「人体の構造と機能」という必修の科目となっている。

なお、本書の巻末には「和文索引」、「欧文索引」があり、「難解用語の読み方リスト」があるのも初学者には親切な設計といえる。福祉・看護の連携には専門用語の共通理解が欠くことのできない要件であるが、本書はそのための最適な書の一冊といえるであろう。

■ 社会福祉学原論：脱構築としての社会福祉学

■ (中村剛著、みらい、2010年5月刊)

社会福祉学部 准教授 中 村 剛



これまで社会福祉学の中核には社会福祉学原論があった。この科目は、社会福祉の根源にあるもの(原理)は何であり、その本質は何であるのかを明らかにするものであった。その代表的な文献が岡村重夫の『社会福祉原論』である。

しかしながら、社会福祉の原理や本質を探究する真の社会福祉学原論はほとんど見当たらず、書名に「社会福祉原論」あるいは「社会福祉学原論」とあっても、中身は社会福祉のあらましを述べている、いわゆる社会福祉概論であった。

このような傾向ゆえにか、社会福祉士の新カリキュラムでは科目から「社会福祉原論」がなくなった(正確には、社会福祉学原論はサブタイトルに格下げされた)。そして、新カリキュラムは、最も大切な社会福祉の原理や本質の探究は諦め、現状の制度の紹介と相変わらずアメリカのソーシャルワークの紹介に終始しているかのようである。

本来、社会福祉学の研究者であるならばすべき原理や本質の探究を行わずに社会福祉教育をしているのだろうか。それは無責任ではないかと感じているのは私だけだろうか。本書の執筆に一端にはこのような問題意識がある。

内容は序論、第I部 原理論、第II部 実体論からなる。序論では、本書がどのような考えに基づき組み立てられているのかが書かれている。第I部の原理論では、社会福祉の原理や本質は何であり、社会福祉の全体像はどのようなものであるのかを説明している。そして、第II部の実体論では、社会福祉の全体像を、対象論、主体論、政策レベル(政策論・法制度論・行財政論・供給論)、組織運営レベル、支援レベルという3つのレベルに分け説明し、最後に権利保障論をおいている。

本書では「社会福祉とは倫理と正義を根底においた支援である」という見解を、結論として示している。「原理論の水準を保ちつつ、かつ、わかり易く」を心がけて執筆した。本書が、社会福祉を学んでみたいと思っている人の気持ちに応えられる内容になっていることを願っている。

児童福祉と心理臨床－児童養護施設・児童相談所などにおける心理援助の実際－ (前田研史編著、福村出版、2009年11月刊)

社会福祉学部 准教授 八 木 修 司

この書籍は児童福祉分野（児童相談所、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、乳児院、等）における心理職の役割と具体的な心理援助等の実際について著したものです。

児童虐待の増加に伴って、子どもの安全・安心を図り、健全育成のために児童福祉施設を利用することが急増しています。また、発達障害を抱える子どもが虐待される可能性が高く、実際にそうした子ども達も児童福祉施設に多く入所しています。最も信頼を寄せるはずの保護者に虐待を受けた子どもの「こころ」の傷は大きく、その心理援助は重要であると考えます。執筆者は長年に渡り児童相談所や児童福祉施設の第一線で心理職を担われた方々が執筆をされているので、児童虐待や発達障害等に関して、心理援助のわかりやすい解説や心理療法の事例が数多く盛り込まれているのが特徴です。

筆者の一人である私（八木）は、「情緒障害児短期治療施設における心理士の役割と機能」（第5章）を執筆しました。情緒障害児短期治療施設は全国でも37箇所（平成22年4月現在）と数少ない児童福祉施設です。治療を冠したように児童精神科医や心理職、看護師、児童支援員といった職種を有する「子

どものこころのケア」の専門施設です。私が著した内容は、①情緒障害児短期治療施設の経緯、②情緒障害児短期治療施設における支援のあり方、③子どもの心理援助の実際（事例も多く載せています）、④保護者へのケアや支援、⑤心理職の役割や他職種との連携、等です。心理士として子どもの心理療法やカウンセリングに携わりましたが、保護者への支援も含めて児童相談所や医療機関との連携を図るためにソーシャルワーカーとしても実践活動しました。詳しくは一読して下さい。

特に、児童福祉分野へ社会福祉実習や保育実習（施設）に行く学生は是非読んで下さい。実習のイメージが高まると思います。また、子どものこころの問題に興味のある方にもお勧めです。児童虐待だけではなく、発達障害や不登校の心理援助や生活支援、ソーシャルワークの支援過程が具体的にわかります。各執筆者は平易な文体を心がけていますので、読みやすい一冊です。



若者再考－自己カテゴリ化理論からの接近 (大和田智文著、専修大学出版局、2010年2月刊)

社会福祉学部 講師 大和田 智 文

本書は、現代の若者によく見られるような一見風変りな振る舞いがどうして生じるのか、そのような振る舞いにはどのような意味があるのか、という素朴な疑問に端を発するものである。しかしそのような疑問に向き合おうとすると、それらを理論的かつ端的に説明できるほどの心理学的あるいは社会心理学的知見の十分な蓄積は認め難かった。たとえば、上記のような振る舞いは、若者自身の性格や育った環境など個人内の要因によって説明するのが適切な若者理解に結びつくのか、あるいは、もっと伝統的なグループ・ダイナミクスに関する諸理論を拠りどころとした方が近道となるのか、このようにいずれの視点をとるべきかというところからしてデータは必ずしも十分ではなかった。そこで本書では、若者行動を理解していくための理論枠組みを一から探索しながら組み立てていくこととした。その上で、人間一般に共通の心理機制によって若者特有の行動が生起する可能性について検証を試みている。

本書は3部構成となっている。第Ⅰ部では、若者特有の行動の多くが社会的文脈の中で生起するものであるため、社会的アイデンティティ理論および自己カテゴリ化理論に従って若者行動を捉え直し、“若者が若者カテゴリへの同化を通して若者らしさを獲得する”という枠組みを導出している。第Ⅱ部では、この枠組みを検証した7つの研究が報告されている。ここでは、若者自身が若者らしさの表現としての一人称の選択を重視していること、社会的アイデンティティ獲得の前提となる社会的カテゴリが選択されると、そのカテゴリへの同化のために必要な

一人称を用いるようになること、そして、ある一人称で括られるカテゴリが明確に知覚されるほど、自身の行動もそのカテゴリにおけるプロトタイプに近づくことを示

し、上記の枠組みの妥当性を証明している。第Ⅲ部では、先行研究との整合を図ると同時に、本書における知見の精緻化の余地について議論を行っている。

日頃多くの若者が集う学校などで、若者の一見理解しがたい言動に直面し悩む人、また、日常場面での若者をさらによく理解することでコミュニケーションの円滑化を図ろうと考える人、さらには、人間一般への理解を深めようと努める人などが本書を手にし、そこに何らかの具体的な解決策や未知の知見を発見してくれるならば、著者として嬉しく思う。



本学教員推薦図書

社会福祉学部 准教授 近 藤 哲 郎

書 名	著者名	出版社	コメント
もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら	岩崎 夏海	ダイヤモンド社	読みやすくわかりやすく面白い組織運営の本。グループリーダーもワーカーも必読！
花びら日記 奈々子の青春	西谷 祥子	小学館	1968年の少女マンガの古典。親世代の青春の課題を知ろう！ ※絶版のため、本学では所蔵しておりません。
痴呆を生きているということ 自閉症論再考	小澤 勲	岩波書店 批評社	人間や社会に対する洞察を一步も二歩も深めてくれる本。 ワーカー必読、特に「痴呆を…」は涙なくしては読めない！
方法としての行動療法	山上 敏子	金剛出版	臨床心理とソーシャルワークの理解をさらに深めうる良書。 熟読の価値あり！

看護学部 准教授 菅 野 夏 子

書 名	著者名	出版社	コメント
無名の語り－保健師が「家族」に出会う12の物語	宮本 ふみ	医学書院	保健師志望の学生だけではなく、将来行政などで働きたいと思っている社会福祉学部の学生さんにもお勧めします。
火車	宮部みゆき	新潮社	「身の丈にあった生活」は簡単そうで難しい。この本を読むことで、カードの恐ろしさと自己を改めて律する気持ちが湧き上がってくる本です。
大学生のためのレポート・論文術	小笠原喜康	講談社	具体的にレポートのレイアウトや引用文献の書き方、よくない論文の例などが書かれているのでお勧めです。
ケアに学ぶ臨床社会学－理解社会学の再生を求めて	勝又 正直	医学書院	看護の関連するキーワード（病や家族といったこと）と社会学との関連を、事例を用いて記載されています。卒論テーマに悩んでいる学生さんにお勧めです。
子育て支援と世代間伝達－母子相互作用と心のケア	渡辺 久子	金剛出版	単に虐待をした親を問題として取り上げるのではなく、虐待が連鎖であることを示しています。「親」とはどういうものなのかを考えさせられます。
幻世の祈り(第1部)家族狩り 遭難者の夢(第2部)家族狩り 贈られた手(第3部)家族狩り 巡礼者たち(第4部)家族狩り まだ遠い光(第5部)家族狩り	天童 荒太	新潮社	5冊読み終えるには時間がかかると思いますが、児童虐待の事例やDVの事例も出てきて、よその家族とは思えない目線で読めることでしょう。

看護学部 助手 藤 井 清 美

書 名	著者名	出版社	コメント
子どもへのまなざし	佐々木正美	福音館書店	エリクソンの発達段階に触れながら、子育ての大切さを語った育児書です。 保育士・幼稚園教諭、小児看護をめざす学生さんに、ぜひ読んでほしい1冊です。
キラリ看護	川島みどり	医学書院	著者の体験を含め、看護の魅力を綴った本です。今、看護師になることに迷い、悩んでいる学生さんに、ぜひ読んでもらいたい1冊です。
得意になる解剖生理－からだのしくみが目で見てわかる	美田 誠二	照林社	とにかく解剖生理が苦手な看護学生さんへ カラーイラストで要点もわかりやすい本です。
いのちに寄り添う。－ホスピス・緩和ケアの実践	柏木 哲夫	KKベストセラーズ	「自分らしい最期」を迎えるために終末医療のあり方を綴った感動の書です。

編集後記

気象庁の発表によると、今夏の日本の平均気温は、統計を開始した1898年以降の113年間で第1位の高い記録だったそうです。本当に暑い夏でしたね。いよいよ後期が始まりますが、皆さん体調は万全ですか？
今年の6月より館内入口正面に“展示図書コーナー”を設置し、毎月テーマに沿った図書を紹介しています。来月（10月）は、この『図書館だより 第21号』に掲載されている図書を展示します。また、裏展示図書では、夏から疲れを引きずってしまっている方のために健康をテーマに選書した図書を紹介します。どうぞお楽しみに。今後も学生の皆さんの勉学と日常生活のお役に立つ図書を館員全員で相談しながら選書していきますので、展示図書コーナーをどうぞご利用ください。（A・N）